

平成 26 年度 教員免許状更新講習・シラバス

講座番号	3	講座名	国語科教育に活かす古典文学研究の成果（１）					
担当講師		開催地	時間数	日程	主な受講対象者	受講人数	講習形式	試験方法
西本 寮子 樹下 文隆		広島キャンパス	6時間	7月26日 (土)	中学校・高等学校 国語科教諭	30人 (最少開催 人数3人)	講義	筆記
到達目標		日本の古典文学の特質と展開について体系的かつ具体的に理解している。						
【講座の概要】 伝統的な言語文化の理解に重点を置く新学習指導要領の特色を踏まえ、「日本における古典知の形成と展開」について考える。古典文学研究の最新成果を紹介しながら、白氏文集など中国文学の摂取と定着の様相を平安朝の文学作品でたどり、後代への展開を軍記や謡曲などの中世文学作品を素材として講じることを通じて、新たな知見を国語科教育にどのように活かしていくのかを考える。								
【講座の内容】 講義１：王朝人の教養基盤（１）（担当：西本 寮子） 平安時代の文学作品を読む際には漢詩文や和歌についての知識が欠かせない。作者と読者が共有していた知識や教養基盤を知ることによって、作品に対する理解が一層深まる。この講義では、『白氏文集』に焦点を当て、平安時代の知識人の教養基盤と想像力について考える。具体的には、『竹取物語』における白詩摂取の様相と物語創作のありように着目し、『源氏物語』の作者が「物語の出で来はじめの祖（おや）」と評した理由の一端を検討する。次いで、『枕草子』の白詩摂取の事例を紹介し、初段「春は曙」を『白氏文集』の世界を踏まえて読む可能性について言及する。 講義２：王朝人の教養基盤（２）（担当：西本 寮子） この講義では『源氏物語』を取り上げ、『白氏文集』に加えて『史記』からの引用・摂取の様相について紹介する。高度に洗練された文章表現から物語世界に溶け込んだ『白氏文集』や『史記』の世界を抽出、分析し、そこから窺われる物語創作の方法の一端を検討する。併せて、紫式部が中宮彰子に「文集のところどころ」を読み、「楽府二巻」を講じた背景、一条帝に「この人は日本紀をこそ読みたまふべけれ。まことに才あるべし」と評された理由について考えたい。 講義３：変貌する漢籍受容（１）（担当：樹下 文隆） 王朝以来の教養として継承された漢籍の知識は、和様化とも言うべき変貌を遂げていった。特に『史記』を中心とした中国史上の事象が中世の軍記などに先例として提示されるに際し、原典と異なる内容に変貌している場合がある。平安時代の漢籍受容の中心は唐代までの作品であったが、中世においては、新に宋・元・明代の作品も視野に入れる必要がある。漢籍軍記や謡曲を例に『史記』受容の日本的展開について考える。 講義４：変貌する漢籍受容（２）（担当：樹下 文隆） 『白氏文集』の受容は、中世においても一定の流行を保っている。軍記や謡曲で好まれる白詩の検討を通して、中世における白詩受容と王朝以来の教養との差異について考える。併せて、謡曲「白楽天」に示されるような、中世的な白楽天像にも言及する。								
【備考】 試験の際には講義で配付した資料、ノートの持ち込みを認めます。辞書は持ち込めません。								

注）予備日は8月2日（土）とします。